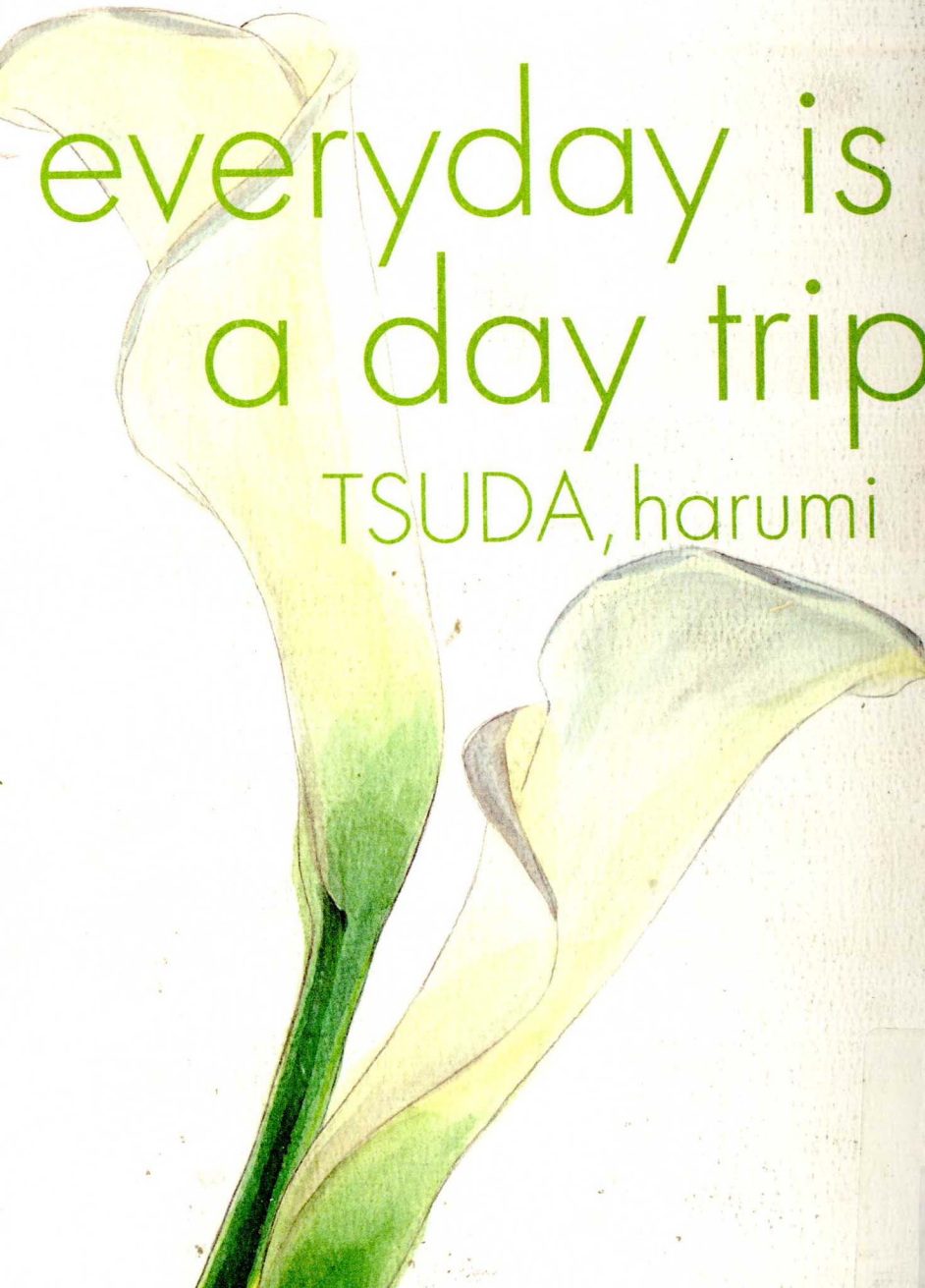
毎日が旅じたく　津田晴美

everyday is a day trip

TSUDA, harumi



津田晴美（つだ・はるみ）
1950年熊本生まれ。建築、ファッション、テキスタイルの会社で企画を担当し、80年代は雑誌のスタイリストとしてインテリアに関わる。90年「ペンプラスインク」設立、ホテルや商業施設の計画など、デザインコンサルティングの仕事をしている。著書に『小さな生活』『旅好き、もの好き、暮らし好き』（以上ちくま文庫）『気持ちよく暮らす100の方法』（大和書房）『GOOD LOOKING LIFE』（TOTO 出版）『あの人の暮らしかた』（筑摩書房）などがある。
e-mail:mxf00017@nifty.ne.jp

毎日が旅じたく —— everyday is a day trip

2002年2月28日　初版第1刷発行

著　者……津田晴美

発行者……菊池明郎

発行所……株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3　郵便番号111-8755　振替00160-8-4123

装　幀……久保田浩樹（ワン・プラス・ワン・グラフィックス）

印　刷……三松堂印刷株式会社

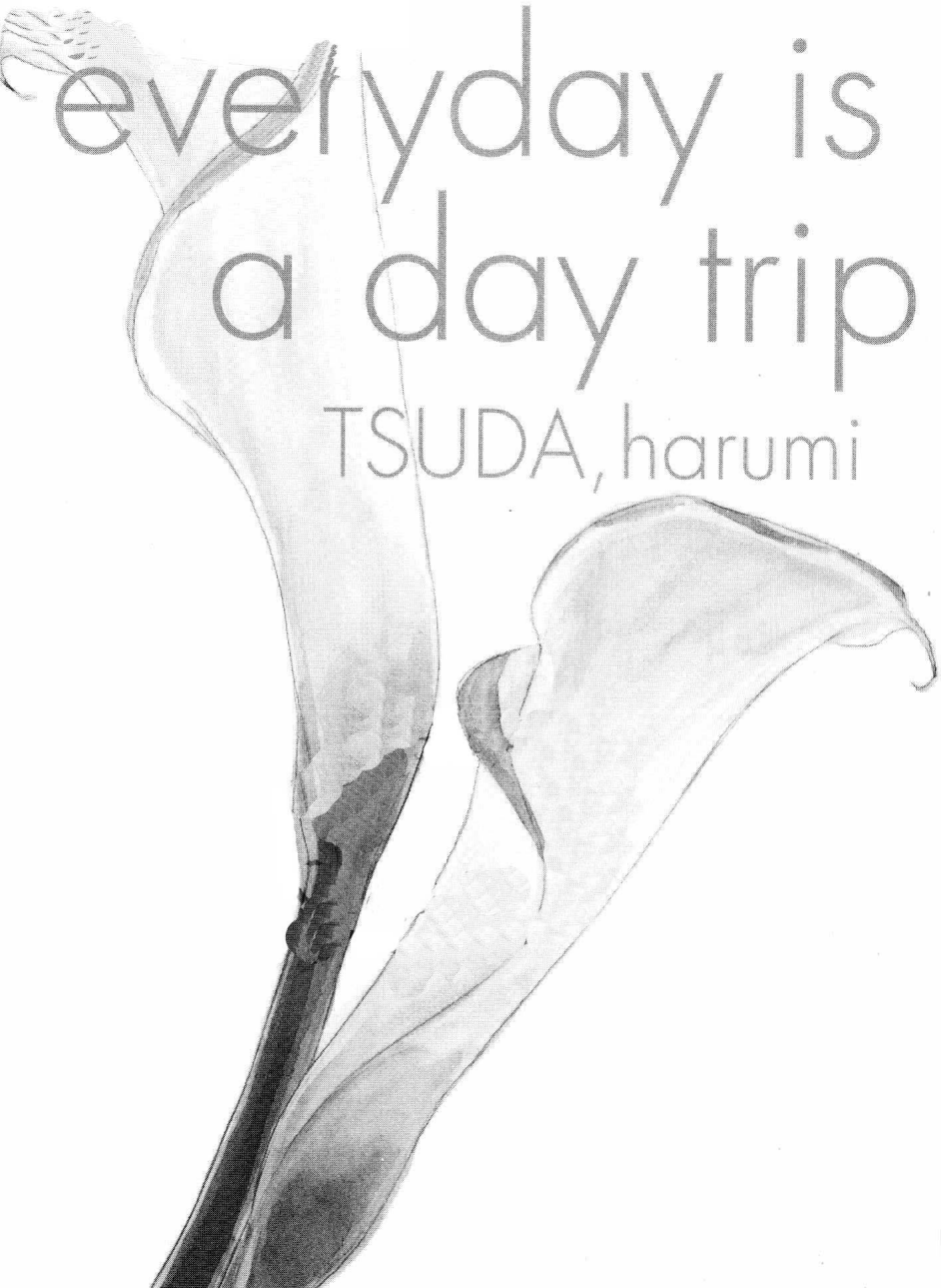
製　本……株式会社積信堂

ISBN4-480-87739-8 C0095　Printed in Japan
©HARUMI TSUDA 2002

＊乱丁・落丁本の場合は、下記宛に御送付下さい。
送料小社負担でお取替いたします。ご注文・お問い合わせも下記へお願いします。
〒331-8507　さいたま市櫛引町2-604　筑摩書房サービスセンター　電話048-651-0053

毎日が旅じたく

津田晴美



目次

遠くへ、遠くへ！

伯父からのプレゼント　13
働く少年　19
夜来香　24
無人島に何かひとつ持ってゆけるとしたら　28
パリの友人たち　34
ブラック・フォレスト　37

ロスト&ファウンド

走りつづける旅　45
旅に誘う本　47

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

旅先の花　ラナンキュラス　51
旅先の花　深紅の薔薇　52
旅先の花　ドッグローズ　54
ビルマの花　55
北欧のブルー　56
高三の小さな旅　57
旅に出て思うこと　61

トランクの中味

最近凝っているもの　65
夢見ること　66
すくなく　69
堂々と　70
ワードローブを見直す　72
部屋着　73

究極はオーダーシューズ　75
オリジナル　76
本当に必要？　77
心を明るくしてくれるもの　79
ニュアンス　81
色を学ぶ　83
暮らしの色　84
赤い指先　90

日々の存在

お元気ですか？　95
野生のすみれ　97
植物たちの誕生日1　99
植物たちの誕生日2　101
都会のキリギリス人の願い　102

毎日がピクニック

グッドクッキングライフ　107
秘密　126
あの夏、柳の木の下で　127
レストランにて　133

仕事の地図を手に入れる

ものは私の一部　139
夢に見たヌメ革のソファが実現するまで　140
いま目の前の木の危機　144
デザインの基本と責任　148
私にとってのホテルとは　151
紙にこだわって　154

アウト・オブ・オーダー

木の家 159
金魚ミーティング 162
ハゲが悪いか?! 166
へそ上ベルト 169
魚は痛みを感じない 172
その人がわかるコーヒーカップ 176
自分のスタイル 178
ひとでなし 181

エピローグ

テイスト 187
自立して 188

ダンディズム 190
ピュア 192
自分らしく 193
アットホーム 195
生活 198
いつの日にも 201
あとがき 203
初出 206

毎日が旅じたく

everyday is a day trip

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

装画・挿画　津田晴美
編集協力　嶋中書店

遠くへ、遠くへ！

この世からとり残されたような場所でこそ、
自分をとり戻すことができる

伯父からのプレゼント

きっとそう遠くない日に雪が降るだろう。ニューヨークは暗灰色の雲に覆われて、この季節は街ゆく人もいちように期待と不安の入りまじった表情でわき目もふらず足早に歩く。

空港へ着いた日に、迎えに来た伯父が五年ぶりの再会を祝って、コートを買いにゆこうと言う。心弾む私たちと荷物を乗せて、車は空港からバーグドルフ・グッドマンへ直行した。

コート売り場へ着くと、胸に長いネックレスのようにメジャーをかけたマダムが出迎えた。伯父がひと言ふた言何か話すと彼女は得心の笑顔で、すぐに奥のハンガーから抜いてきたコートを後ろから掛けてくれた。鏡の前の、旅の格好のままの少し気後れした私を包み込んだものは、夜の海を纏(まと)ったような深い紺の、足首まで届きそうなカシミヤのドレープ。滑らかな光沢が、テイラードの襟の流れと肩の稜線の在りかを導き出す。

伯父は私の真後ろに立って、いかにも建築家らしいてきぱきとした口調で数字を並べていった。

「袖を4分の1、裾幅を半身で1インチ、丈を2インチ……」

私はその指示を夢見心地で聞いた。

それから一週間後の夜遅く、ホテルに帰るとメッセージが二つ届いていた。「バーグドルフ・グッドマンからコートの仕上がり」「明日のランチを一緒に。ザ・フォーシーズンズにて一時に待つ。伯父より」

いずれもそう遠くないので翌朝は十時に起きて、散歩しながら、昼近くにコートを受け取るが少し手間取り、ランチの約束をした場所へと急ぐ。パークアヴェニューから東五十二丁目へ。ミース・ファン・デル・ローエの有名な高層建築、シーグラムビルにあるレストランへ着いたのは一時過ぎだった。

壁のピカソやミロに心奪われながらも時計を気にしつつ名前を告げた。案内されるままに付いてゆくと、彼はすでにテーブルで待っていた。

丸くて厚い偉大な背中、薄く細くなった銀色の髪に几帳面に櫛目を入れた姿がそこに座っていると、洗練されたクールな空間に親しみと渋さが加わって調和がとれる。そっと近

づくと新聞の向こうから、いつものようにボルドー色した縁の老眼鏡を鼻先へずらして私を見上げた。思考の跡の深く刻まれた額のしわがゆるんで目尻にはいくつもの曲線が重なり、仕事に向かう顔から優しい見慣れた表情に変わる。すると私は幼いころの甘く満ち足りた記憶に連れ戻された。あのころも、この一瞬だけは世界のすべてが私のもののように感じたこと。

「どうだったね？」

「まるで誂えたみたい。着るたびにきっとこの日を思い出すわ。ありがとう」

「今夜あたりは雪が降るんじゃないかね。あとでホテルに言っておこう」

「なんて？」

「雪が降るから寒くないようにしておいてくれってね」

私はいつもここでその先を問いかけるのをやめる。彼がそのような言い回しをするときには、あとにいつでも素敵な謎解きの答えが待っていたからだ。夢は自ら待つ者へ。しつこく追いすぎると逃げてしまうのだ。

「あのホテル……」

と私が上手に話題を切り替えると彼は満足そうにうなずいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com